Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-04-29

Formulation Practices in Interaction: Some Procedures and Context-bound Features

岡田，悠佑

(Degree)
博士（学術）

(Date of Degree)
2012-03-25

(Date of Publication)
2013-02-18

(Resource Type)
doctoral thesis

(Report Number)
甲5554

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005554

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

［課程博士用］

論文審査の結果の要旨

氏　　名	岡　田　悠　祐		
論文題目	Formulation Practices in Interaction: Some procedures and context-bound features (相互行為における形式化の実践－手続と文脈依存性)		
判　　定	(合　格)・不　合　格		
審査委員	区　分	職　名	氏　　名
	主　査	教授	加　藤　雅　之
	副　査	教授	横　川　博　一
	副　査	准教授	Tim Greer
	副　査	特任助教 (大阪大学)	Don Bysouth
	副　査		印

要　　旨

本論文は、会話の参加者が発話という相互行為において、特定の形式（formulation）を選択することで何を成しているのか、そしてその選択に何か一般的なやり方（「形式化の実践」＝formulation practices）は存在するのかを明らかにし、そのあり方を外国語授業・英語オーラル試験でのロールプレイ及び科学工学系国際学会発表質問応答場面といった3つの自然会話データコーパス（合計約30時間）の収集・連鎖構成的な分析によって解明し、話の流れで生まれてくる「意味合い」に焦点をあて、その特徴と課題について会話分析（CA）および分類表的分析（Taxonomic Analysis）に基づいて考察したものである。

論文の構成は以下のとおりである。Chapter 1 Introductionでは論文の主旨と目的を述べ、Chapter 2　Method and Dataでは本論文の研究方法である会話分析と成員カテゴリー分析（Membership Categorization Analysis=MCA）を紹介する。また、これまで日本では取り上げられてこなかったJack Bilmes(2008, 2009)の分類表的分析との関連を説明する。Chapter 3 Literature Review on Formulation Studiesではこれらの研究方法に基づいた関連文献を総括し、会話上の形式化に関する事前研究を紹介する。Chapter 4から Chapter 6では、具体的な分析が行われる。

Chapter 4 Priority in Formulationでは、相互行為における優先性に焦点をあて、教師の質問及び誤りの訂正理由の説明、OPIインタービューの質問及び自己修復依頼という行為の形式化の実践において、優先と認められる事例を取り上げ、なぜそれが行われたのか、その中心概念が詳述・分析されている。

Chapter 5 Generalization and Scaling of Identity in EFL Classroom Interactionでは、会話で現れるアイデンティティの一般化と尺度化について述べ、EFL授業における自然会話コーパスから複数の具体例を取り上げ、異文化間交流の実践、作文課題参照記事の説明、遅刻欠席への警告といった語学教師の仕事を効果的に達成するために、教師は教師という役割を保持しつつ、自己と学生の関係を「持ち運び可能アイデンティティー」に基づき一般化そして尺度化により不断に構築することが考察されている。また、尺度化が形式間の横の関係だけでなく縦の関係を再構築することや持ち運び可能アイデンティティーの持つ交渉不可能性と意味の構築の関係がアイデンティティーの選択に寄与していることが示されている。

Chapter 6 Minimization of Knowledge Dissolution and Maximization of Knowledge Reclamationの目的は、会話の参加者が特定の事柄への知識がどのように形式化に作用するか、形式化が参加者の知識をどのように構築するか、を解明することである。コーパスから21件の会話例を分析し、知識の有無が問われる学会発表質疑応答場面での「前」回答部分において、"uh"は質問事項に対する知識が無いと思われる否定的類推を最小限にするため、また"okay"は質問事項に対して、解答者に対する（この人は知識があるのではないかという）肯定的類推を最大限にするため戦術的に用いられることであることを発見し、そのメカニズムを分析している。最後に、Chapter 7 Conclusionでは、本論文での主張をまとめるとともに、検討が及ばなかった点および今後に残された課題について言及している。

本論文の独創性は、Bilmesの最新研究に基づく分析方法を加えることにより、今まで会話分析では必要とされてきたが十分に実現できなかった語彙選択とディスコース上の間主観性との関連をより明らかにした点にある。また、この研究方法では初めて日本人英語学習者のデータを用いて、第2言語会話と言葉選択の関わりについての具体的な現象が指摘されるなど、今後の外国語教育におけるディスコース分析研究において不可欠の資料となることは疑いない。

本人の発表の多くは英語で行われ、本論文は英語で書かれ、これから社会言語科学分野において世界的に注目される研究とも言える。岡田氏のこれまでの発表論文には以下のものがあり、中でも岡田（2010c）の掲載誌*Journal of Pragmatics*は応用言語分野のトップ10に入る国際的研究雑誌であるなど、いずれも本研究科が要求する学問的水準に達している。

既発表論文

- 岡田悠祐（2011）「第二言語学習教室における「教育」のためのアイデンティティー使用：「先生」、「学生」、「老人」、「若者」の一般化と尺度化」『第28回社会言語科学会研究発表大会論文集』pp.100-103.
- Okada, Y. (2010a). Learning through peripheral participation in overheard/overseen talk in the language classroom. In T. Greer (Ed.), *Observing Talk: Conversation Analytic Studies into Second Language Interaction* (pp. 133-149). Tokyo: JALT. （レフェリー付）
- Okada, Y. (2010b). Repairing "failed" questions in foreign language classrooms. *JALT Journal*, 32(1), 55-74. （レフェリー付）
- Okada, Y. (2010c). Role-lay in oral proficiency interviews: Interactive footing and interactional competencies. *Journal of Pragmatics*, 42(6), 1647-1668. （レフェリー付）

以上により、本審査委員会は審査員全員一致で、本論文は、博士（学術）の学位を授与する水準を満たしていると判断した。

論　文　要　旨

氏　名　岡田　悠佑

専　攻　グローバル文化専攻

指導教員氏名　Tim Greer 准教授

論文題目（外国語の場合は日本語訳を併記すること）

Formulation Practices in Interaction: Some Procedures and Context-bound Features

（相互行為における形式化の実践–手続と文脈依存性）

論文要旨

Most of the things we do in our lives are done through interaction. Conversation analysis (CA), a sociological approach to (inter)action, aims to explicate what we do in interaction and how we construct social institutions in interaction. The first project of CA is sometimes called 'pure' CA, in that it primarily explicates the procedures of participating in interaction, while in recent years a form of 'applied' CA has also emerged, whose aim is to investigate how these procedures can be applied to specific instances of social institutional talk. Currently, both 'pure' and 'applied' CA are becoming increasingly diverse, including the analysis of cross-cultural communication, second language talk, bilingual interaction, and varieties of talk in institutional settings. Within the 40-year history of CA, however, one of the generic procedures we routinely carry out in interaction across settings has not been adequately studied: the practice of formulation.

Formulation refers to a particular way of turning a referent (e.g. an object, a concept, a state of affairs, an act) into an observable-and-reportable phenomenon, such as a word or behavior. The study of formulation practice is an important part of CA, both 'pure' and 'applied' in that formulation practice is a generic practice we do in interaction and a speaker's choice of a particular formulation is normatively sensitive to the situational (social, institutional) context as well as the local sequential contexts. While a number of studies have been done on *what* is achieved by a particular formulation, they do not account for *how* and *why* (or *for what)* the formulation is selected among plausible formulations of a same referent. Only very recently, a few studies have investigated participants' practices for selecting formulations in interaction.

This dissertation aims to explicate the local and situational accomplishment done by a participant's practice of selecting a specific formulation and general procedures of such practices in form and content of expressions in interaction, which encompasses not only word selection but also action formulation. The data for the analysis is comprised of three types of interaction: EFL classroom talk, OPI role-play interaction, and Q&A sessions during international scientific conference presentations. Chapter 4 examines the notion of *priority* as a formulation procedure and discusses its value as a method of doing interaction through the analysis of first-language speaking teachers' actions in English as foreign language classrooms and the testers' repair practice in OPI role-plays. In addition, the chapter discusses the necessity of taking into account the objective of interaction in order to understand a formulation practices. Chapter 5 turns the focus towards *discursive taxonomy* and investigates the formulation procedures of *generalization* and *scaling* through the analysis of several examples of first-language speaking teacher and students' interaction in EFL classrooms. The chapter also considers the intelligibility and effectiveness of a formulation in relation to the participant's identity. Chapter 6 examines presenters' selection of formulations at a pre-second position after a question in the Q&A sessions at international scientific conference presentations. This chapter investigates the relationship between the formulation practices and construction of knowledge in interaction.

This CA study contributes to the understanding of one of the most fundamental aspects of our social life, that is, interaction. In addition, the study fulfills the classic project of sociology, that is, to understand the relationship between the social actor and the society s/he lives in. Although the study does not predict any formulation in the

diverse social organizations according to a positivistic stance, it does aim to provide an account for participants' actual interactional practices from their own, participant-relevant, i.e., emic perspective. The careful observation of natural interaction helps us to recognize the reality of EFL classroom talk, OPI role-plays, and Q&A sessions and provides important insights into will be reflected in teaching practice, course design, and material development.

日本語要旨

我々が日々の暮らしの中で行うことのほとんどは相互行為の中で行われる。(相互)行為の社会学である会話分析（Conversation Analysis: CA）は、我々が相互行為の中で何を行なっているか、そして相互行為を通してどのように社会制度を構築するか、の２点の解明を目的としている。相互行為での参加手続き・方法の解明を主とする前者のような CA は「純粋な」CA と呼ばれることもある。同様に、そういった一般的な相互行為のやり方が社会制度的会話にどのように応用されるかということの解明をはかる後者を近年、「応用」CA と呼ぶことがある。現在、異文化間のコミュニケーションや第二言語での会話、二言語併用者の相互行為、種々の制度的会話の分析がなされており、「純粋」及び「応用」CA の両者とも多様となってきている。しかしながら、CA の 40 年の歴史の中で、相互行為の中で状況によらず日常的に行われている一般的な手続きの中で十分に研究されていないものが１つある。それは形式化の実践である。

形式化とはモノやコンセプト、心的状況、行為などの指示対象を言葉や振る舞いなど可視聴化できる現象に変える方法である。形式化の実践を探ることは「純粋」、「応用」のいずれの CA においても重要である。なぜなら形式化の実践は相互行為における普遍的手続きであると共に話者の特定の形式の選択は規範的に（社会、制度）といった状況・環境そして連鎖構造といった文脈に依拠するからである。これまでに特定の形式が何を成しているかという研究はなされてきているものの、「なぜ」そして「どのように(何のために)」、特定の同じ指示対象の他のあり得る形式からその形式が選択されたのか、ということには答えていない。ごく最近になりようやく、いくつかの研究が相互行為における参加者の特定の形式の選択（形式化の実践）について調査を始めたばかりである。

本博士論文は参加者の特定の形式選択の実践が相互行為の局所及び状況において何を達成しているか、及び言葉の選択だけでなく行為の成形も含んだ形式化の実践に普遍的な方法はあるのか、の２点の解明を目的とする。分析に用いるデータは EFL 教室コーパス、OPI ロールプレイコーパス、科学工学系国際学会発表質疑応答場面コーパスの３つからなっている。第４章は形式化の実践における優先性という概念を調査し、英語授業における母語話者である教師の行為及び OPI でのロールプレイにおける試験員の修復行為の分析を通して優先性の相互行為における方法としての価値を議論する。さらに、形式化の実践を理解するためには相互行為の目的を勘案することの必要性を議論する。第５章では談話タクソノミーに焦点を当て、英語授業における教師と学生の相互行為の分析を通して、一般化及び尺度化という形式化実践の手続きを探る。また、特定の形式化の明瞭さと効果について参加者のアイデンティティーとの関係から議論をする。第６章は質疑応答場面における発表者の質問を受けた後の前返答部分の形式化の選択を調査し、知識と形式化の実践の関係、相互行為における知識の構築について議論を行う。

本博士論文は社会生活の中の最も根本的なものの１つである相互行為の理解に貢献する。さらに、本研究は行為者と社会の関係を解き明かすという社会学の古典的な取り組みのを成し遂げるものである。本研究は実証主義的な立場から多様な社会構造における形式化の実践を予測するものではなく、参加者に関連付けた視点、つまり内的な視点より参加者の相互行為での実践に説明することを目的としたものである。相互行為の詳細な観察は英語授業での会話や OPI ロールプレイ、質疑応答場面でのやり取りの実際の有り様の認識を可能とし、教育実践やコース設計、教材開発などに反映することのできる洞察を与えるものである。